

ほ場間差大きい！ 適正な肥培管理を！

1 気象経過及び生育状況

【気象経過】

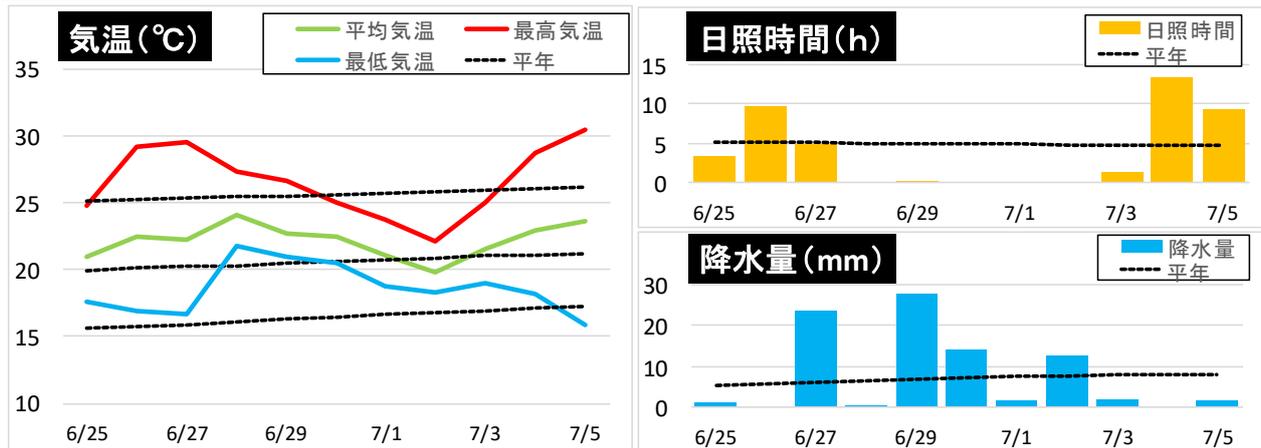


図1 気象経過図（アメダス鷹巣）

- 平年値と比較した6月6半旬、7月1半旬の気温は高く推移しました。また、日照時間はやや少なく、降水量はやや多く推移しました。
- 7月6日に仙台管区气象台が発表した東北地方の向こう1か月（7月8日～）の予報は、気温が高く、降水量が平年並か多く、日照時間がほぼ平年並となる見込みです。

【生育状況】

- 7月5日現在の生育（あきたこまち：9地点平均）は、草丈は平年よりやや長く、茎数は平年より少なく、葉色と葉数はほぼ平年並となっています。
- 日照時間が少なく、気温の日較差が小さい日が続いたため、茎数の増加率が低くなるとみられます。
- ほ場間差が大きくなっています。自分のほ場をしっかりと確認し、適切な水管理に努めましょう。

表1 定点調査結果（7月5日）

	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉数 (葉)	葉色
本年	55.1	486	10.5	43.5
平年	52.8	576	10.3	43.1
前年	58.5	399	10.4	46.8
平年比	104%	84%	+0.2	101%
前年比	94%	122%	+0.1	93%

※平年は過去10か年の平均値を示す。

※葉色はSPAD-502で測定した。

2 中干し後の水管理

- 中干し後は、根の活力を維持するため、急激な湛水管理は避けて間断かん水を行います。幼穂形成期に土壤水分が不足すると1穂着粒数が減少しますので、中干しは幼穂形成期までに終わります。今後の状況に合わせて適切な水管理を行ってください。
- 中干しを十分にできなかったほ場では、落水期間をやや長めとする間断かん水により地耐力を高めます。

○カドミウム含有米の発生防止対策地域では、田面が空気に触れないように出穂期の前後各3週間（7月15日頃～8月25日頃）の常時湛水管理を徹底します。

3 主要病害虫の防除対策 ～ドリフトに注意！～

※飼料用米も主食用米と同様に、病害虫防除を行ってください。

【いもち病】

○BLASTAM（アメダス）の判定では、県内各地で6月23～25日にかけて感染好適日が観測されました。感染から発病まで通常5日～1週間かかるため、ほ場の見回りにより早期発見に努めましょう。病斑を発見したら直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン、ノンブラス等）を茎葉散布してください。

【斑点米カメムシ類】

○本年は、斑点米カメムシ類の発生量は多いと予想されています（病害虫防除所：6月27日発表）。水田内のホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエの除草を徹底しましょう。
○畦畔でイネ科雑草が出穂していると、斑点米カメムシ類の発生量が多くなる傾向にあります。出穂の10～15日前まで畦畔や農道等の草刈りを徹底し、斑点米カメムシ類の発生源をなくしましょう。地域で一斉に草刈りを行うと効果的です。

4 幼穂形成期の追肥判断

【幼穂形成期の予測】

○日平均気温から算出したあきたこまち（中苗）の幼穂形成期（幼穂長2mm期）は、平年より早まることが予測されます（表2）。
○田植時期による差があることから、各ほ場を確認し、管理を適期に行ってください。

表2 あきたこまち（中苗）の幼穂形成期予測（アメダス鷹巣）

田植日	幼穂形成期（平年値）
5月15日	7月8日（7月13日）
5月20日	7月12日（7月16日）
5月25日	7月15日（7月18日）
5月30日	7月18日（7月21日）

※7月6日以降は平年値で計算した。

【栄養診断による追肥の判断】

○幼穂形成期に栄養診断（図2）を行い、表3を参考に追肥を検討してください。
○幼穂形成期の極端な葉色低下は、1穂着粒数の減少や有効茎歩合の低下を招きます。
○幼穂形成期に葉色が濃く草丈が62cm以上ある場合は、倒伏の可能性が高くなるため、穂肥の施用を控えます。

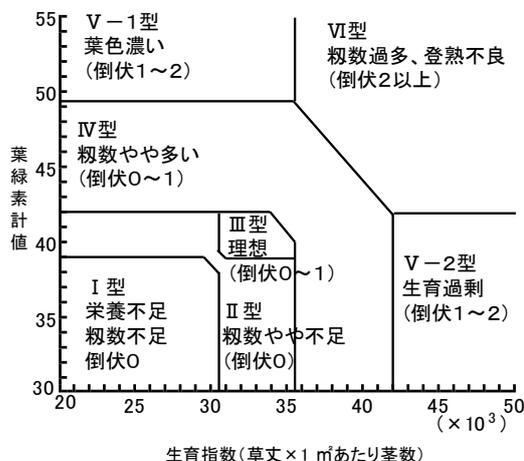


図2 幼穂形成期における栄養診断（県北）

表3 生育型における窒素追肥量

生育型	窒素追肥量(kg/10 a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
I型	2 kg	2 kg
II型	2 kg	2 kg
III型	ムラ直し1 kg	2 kg
IV型	なし	2 kg
V-1型	なし	ムラ直し1 kg
V-2型	なし	ムラ直し1 kg
VI型	なし	なし

※目標収量570 kg/10 a（あきたこまち）

問い合わせはJ Aまたは農業振興普及課まで ～次回発行は7月中旬頃～